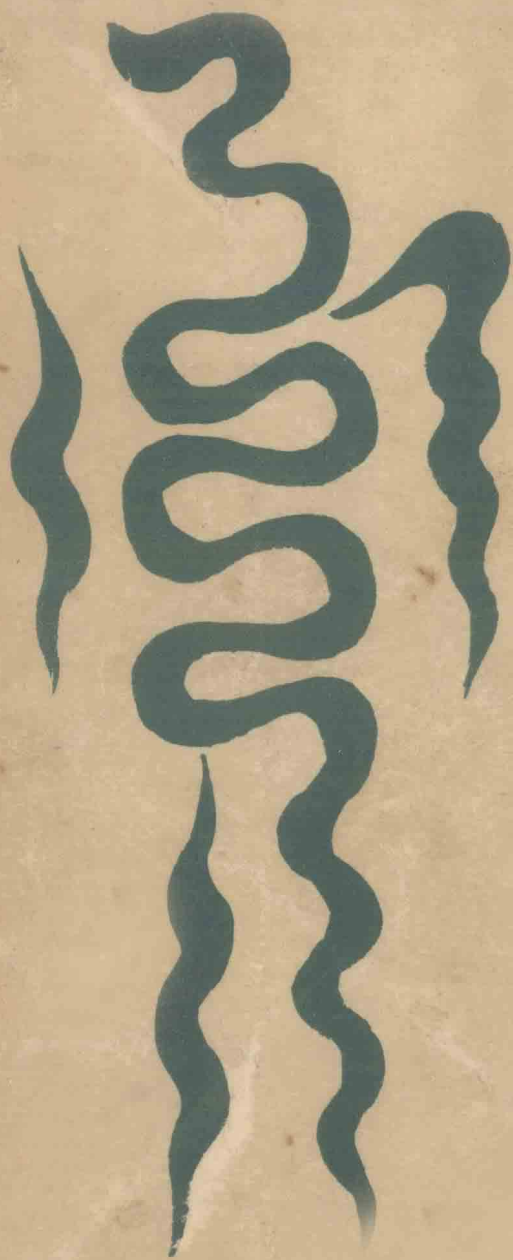






半人間

大田洋子

半 人 間

昭和29年6月20日 第2刷発行 ￥ 260

著 者 おお た よし こ
大 田 洋 子
東京都文京区音羽町3の19
発 行 者 野 間 省 一
東京都文京区関口町 140
印 刷 所 盛 英 信
東京都文京区関口町 140
印 刷 所 慶昌堂印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株式会社 大日本雄弁会講談社
音羽町 3の19
全 国 出 版 振 替 東京 3930
協 会 会 員 電 話 大塚(94)代3101・3111・3121

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (昭和製本)

PRINTED IN JAPAN

半人間 目次

半 人 間	 3
残 醜 点 々	 85
山 上	 133
ど こ ま で	 175
恋	 205

装幀・岡本太郎

半 人 間

陽は落ちかけていた。池袋の街を走つてゆく自動車のなかに、篤子は竹乃をつれて乗っていた。竹乃をつれて乗っているというよりも、篤子の方が竹乃につれられて行つていようなものでもあった。竹乃は篤子の使つている家事婦で、四十歳をすぎ、篤子が虚心でいるとすぐに強い反応を見せ、一歩うわ手にでくる女だった。

車は池袋から大塚にむかつて、のろのろと走つていた。一般に「白線」とよばれている、車体を白い線の帯でまいたマークつきの、安手の流し車であった。篤子が自動車にのることにさえ、病的な怖れをいだくようになっていたので、竹乃は冒險好きな若い運転手をさけ、年をとつた運転手の車を見つけてきたのだ。車のなかにはふたりの女のほかに、布団づつみや、少量の食器や、洗面道具や着替えの衣類を入れた鞆まで、いつしよにはいつている。和服を着た篤子は、押しつぶされたような窮屈な恰好で、窓にへばりつくように小さくなつて腰かけていた。

篤子は町々の空気が気持ちよく乾いているように思つた。しかし車の窓はどこも硝子がびつたりとしまつていた。運転手や竹乃は、夏の日ぐれの乗物の窓に、風のふき入る快適さを味わいた

いに相違なかつた。篤子にはそれがわかつていた。人のめいわくにはおかまいなしに、どの窓もみんな閉めさせているが、人を傷つけているというその痛みが、篤子の心のどこかでは疼いていた。窓をしめていても、風にふかれていたようなうすら寒さが、篤子の皮膚の感覚にながれていた。布団包みのうえで、紙にくるんだ花の束がゆれている。三四日まえ、白い菊と紫の都忘れを持ってきた放送局が、もうそういうことのできなくなっている篤子の眼の前に、無理にテーブルコーダーをおき、八年前の八月六日の朝の回顧をしやべらせた。篤子は布団の上でゆれている花の束から眼をそらせた。

窓の外の空気が相変らず乾いている気がしていた。そのうえ篤子の眼には人の姿も充分にはいらなかつた。夏の夕方の街が雑沓していかない筈はない。湿気をふくんだ雑沓の街であるかも知れないのに、篤子は人氣のない乾いた街だと思つていた。自分のうちに、始終しめつばい意識が流れつづけることのくるしみから、いまちようと逃げてゆくところだつたから、すべてのものの湿気と人の影とを、篤子は見ようとしていないのだつた。篤子は竹乃の顔をも見ないで、二三の男女の名を口に、

「あのひとたちには、まるでうそをついておく訳にもゆかないだろうから、病院へはいつたことを云つていいわ。ほかはみんな、旅行中にしとくのね」

前にもそのことは竹乃に云つておいたのだつたが、篤子はまたそれを云つた。すべて一度云つたのでは心配で、二度ないし三度くらいも同じことを云わなくてはいられなかつた。同じことを

何度云つて見ても、相手にそれが通じたのかどうか、結果がきてみなければ確實ではないという不安定な感じが、そのころの篤子につきまといつていたのだつた。

「その方たちは、病院へお見舞いにいらしても、よろしいのでございますか」

日ごろ竹乃の言葉使いを、馬鹿ていねいだと云つて、篤子はいやがつていたが、竹乃はやはりその調子で訊いた。

「見舞いにきてもらつたつて、仕方がないでしょ。私はすぐにねむるのだから。房田先生も、名前を変えて、面会謝絶にしておきましょうねつて云つてらしたわ」

篤子は自分の言葉で、なにかの恨みがましい思いに心をつまずかせた。しかしこの場合、自分の思いに深入りすることは禁物であつた。固定した想念に落ちこまないように、篤子は絶えず自分をひきとめていた。自分のちかごろの想念が病的である限り、それを何かの思考だと思ひあやまつて、深くはまり込んで行くのが無益なこととはわかつていた。

一九五二年の現在、なににあざむかれてゐるのかわからないが、あざむかれてゐるという意識には、確かな手応えがあつた。考えてゆく階段の幾つ目かで、自殺する手がかりをつかむとか、ひと思いに氣を狂わせてしまふとか、そういうことがないとは限らないと、篤子は思ひ込んでゐるのだ。篤子は死や発狂の思ひを極力警戒していなければならなかつた。

白線の自動車は黄昏ちかい町々を、のろくさと縫うようにして走つていた。

「ここ、どこなの？」

篤子はさつきから硝子窓に顔を向けたまま、じつと外を見ていた。

「大塚、こまごめと走つてまいりましたから、日暮里でございます」

どの町もどこかで見た風景だと篤子はおもつた。現在の現実にある町でなく、記憶の底に焼きついている町の風景がそこにあつた。敗戦直後、どこの都会でも見なければならなかつた赤錆びだトタン小屋が、車の窓の外に点々と続いていた。半ば土のなかに埋もれたような、小さなトタン小屋に、買物籠をさげた女がはいつてゆくうしろ姿を篤子は見た。女は入口をはいるとき、思いきり頭を低くしてはいつて行つたようだった。別のトタン小屋は破れかけていて、人の住居とも思えなかつた。しかし子供がまわりで遊んでいた。バケツをもつた老婆が小屋から出てきて、あたりに水をまきはじめた。篤子の眼に涙がふき出てきたのは、そこいらをうずめているトタン小屋のためではなく、人のうごく姿を見た瞬間であつた。洗濯物を取りいれている女たち、外から帰つてきて小屋の入口をはいつてゆく男達。人々はどうのような状態においても、生きて行くうとしていた。篤子は例によつて鋭いかなしみにおそわれ、とつぜん鼻の横がさすように痛くなつてくると、涙があふれてきた。竹乃に涙を見られたくなかつた。顔は窓の方に向けたままでつた。(私はやはりいくらか病氣なのだ。トタン小屋から人が出入りするのを見るだけで、戦争の惨苦を思い、泣いてしまう)これを口にして竹乃にいうことはあふないと思つた。篤子は竹乃をもおそれていた。竹乃がいちど篤子を自殺にさそつてからは、竹乃に距離をおいて口をきいた。理由がなんであるにせよ、愛情の關係の確立していない女主人にむかつて、いつしよに死の

うと誘つた竹乃の性情に、篤子は好意をもつことができなくなつていた。

篤子は自分が沈んださびしい様子をしていることに気づいていた。逆に竹乃はこれからの何週間かを、女主人のいない留守宅で気らくに暮せることを計算しているらしく、元氣づいた、弾んだ様子であつた。

2

篤子と竹乃は、廊下の片方の壁にくつついている木の長椅子に、浅く腰かけていた。篤子は一週間まえ、この大学の附属病院で診察をうけ、入院をすすめられたのだつたが、そのとき診てもらつた房田医師とは電話の連絡で、この夕方にくるのを、待つてもらう約束になつていた。夏のながい黄昏も暮れている。廊下はほの暗く、人氣はなかつた。房田医師の姿もどこにも見えなかつた。赤い煉瓦の建物の入口に、毛のなめらかな黒い犬がいて、金茶の眼を光らせて篤子たちを見たが、自動車からおろした荷物は、その黒犬の見張つている玄関においてあつた。

声のかん高い看護婦が、房田医師を探すために二階へ消えてゆくと、篤子と竹乃は廊下の突きあたりきて、木椅子にかけたのだつた。廊下のつきあたりだと思つたのは、実際には行きどまりではなく、厚味をもつた木の扉が、廊下の幅いっぱいにびつたりと重くるしく閉まつていたのだ。扉には頑丈な鍵がかかつていた。人々は勝手にそこをひらいて出入りすることは出来なかつ

た。合鍵をもっている者だけが、その厚い大扉を開けることをゆるされている。合鍵は医師と看護婦だけが持つていた。その説明書きが、女文字のような比較的うつくしい筆の字で書いて、壁にはられている。それではこの扉が外部との接触を遮断するのか。篤子の眼に瞬間その扉が暗い鉄の扉に見えた。けれどもこんにちの社会からの隔離は望むところであつた。そのために自分はここへ来たのだと篤子は思つた。普通に想像されるこの扉の内側への恐怖を、篤子はそのとき感じなかつた。怖ろしさは扉の向うにでなく、こちら側に充満している気がするのだつた。

「房田先生は、もうお帰りになつたのかも知れないわ」

篤子は力のない消えるような声で云つた。

「出かけるのが遅うございましたからね。お待ちにならなかつたかも知れせんわ」

竹乃の声に家をおそく出たことにたいする非難のひびきがこもつていた。自分の入院を篤子は人に知られたくなかつた。旅行はよくしていたから、近所の人たちをもそう云つて誤聞化そうとしたが、布団や炊事道具をもつて、旅行するとは云いにくかつた。「不安神経症」という病名を人に話すのに、ある苦痛を覚えた。病名よりも、病状の苦しみの原因がいつたいどこにあるのか、篤子にもつかみがたいのだ。概して周囲から、氣質的にわがまま者であると見られていたから、うかつに病状を訴える気はしなかつた。ヒステリー、更年期障害、わがままという判断をくだされる懸念があつた。この四五ヵ月の病状は、人と口をきくこともいやになり、顔を見られることさえ煩わしさを感じていた。来客を部屋に通しておいて、そこへあとからはいつて行つても、む

つとして口もきかず、ぼんやりと空間を見ていた。

人眼につかぬ夕方を待つて家を出てきたのだが、房田医師が帰宅してしまつたのかと思うと心細かつた。

「一週間ほど眠つていただくのですね」

最初にここへ来たとき、房田医師はたしかにそう云つた。そのときも夜であつた。他の人から紹介されて来た篤子を、四十前後の正直な顔をしたその医師は、二階の図書室のような部屋に通した。疲労しきつて声も出ない彼女を、堅い木の寝台にやすませたが、肉体上の診察はしなかつた。医師は原子爆弾を素材に書いた篤子の小説の一冊をよんでいた。

「どうなさいました」

「わたくしも、原民綺のようになりかけております。その一歩手前みたいな気がしてならないんです」

医師は前年の晩春に自殺した詩人のことを知らない様子をした。原民綺がおのれの体験の原子爆弾の記憶の脅迫と、朝鮮動乱から感得せずにはおれぬ戦争拡大への不安から、自己をうしないはじめて、自殺したのであることを、篤子は話した。医師と話することにさえ篤子は深い倦怠をかんじた。

「わたくしは、終戦のころからひどい不眠症でこまつておりました」

「ご主人は？」

「いま、うちにはおりませんけど、傍に眠つていてもだめなんです。主人は原子爆弾の落ちた日には日本にいませんでしたから、焼きついているものがなくて、すやすや眠るのですけれど、私の方は眠りかけますと、頭のなかを屍体の行列が通つて、一睡もできませんでしたの。終戦後、二三年のち東京にもどりましたところから、毎晩夜の二時ころになりますと、それはものすごく蕁麻疹がでましてね、からだ中を洋服のブラシで掻いてもらうようでした。肉やお魚に關係なくて、何十日も夜中になるとくるしめられましたけれど、お医者様にもわからなくて。そのうち抗ヒスタミン剤の注射をしていただきましたら」

「すぐ引きましたでしょう」

「はあ。注射が半分もはいらないうち、すうつと蕁麻疹がひいて、それからすぐ眠くてたまらなくなりました。何年目かにぐつすり眠りまして、ああ、この薬で救われると思つたんです。これで眠れる、そう思つて」

篤子はその注射を自分でした。蕁麻疹には關係なく、原子爆弾からうけた心理の損傷を、その薬品の麻酔で消そうとした。軽い酒の銘酩のような、快い麻痺が得られた。

そのようなものをつづけていて、あとでどんなことが起きるか、それを篤子は考えようとしなかった。何か考えそうになると睡眠剤をのみ、抗ヒスタミン剤の注射をした。文学の仕事に立ち向う際、頭の冷澄を欲したが、澄んで来た頭はなにごとかを深く考えようとした。篤子は原子爆弾の素材で作品を書きだすと、感情の昂まりを抑えるため、抗ヒスタミンの注射をぶつつづけに

した。頭にもからだにも濁濁が来、ふらふらして、血のにじむ怨恨の回顧を、距離をもつて眺めることができた。彼女は薬の使い方をつかんだ。使い方は悪用にほかならぬものだつた。眼に見えてきた時代の重圧感に、耐えられなくても耐えられても、生きているつもりであるならば、否応なく耐えているよりほかはなかつたが、いきどおりのために眠れぬ夜、篤子は夜中に二三度も起きてその注射をうつた。だんだんに効かなくなつてくるのが致命傷におもわれて来た。心悸昂進と胸を圧搾するような副作用のために、昼夜寢床につき、仕事はしなくなつた。食欲をうしなつていた。食べようとすると吐いた。注射をするといくらかの食欲が出、そして眠つた。

「一日に何本くらいなさいました？」

医師は気軽な笑い顔で訊いた。

「はじめは二ccのを半分くらいで眠つておりましたのにね、いまでは一昼夜に四本くらいいたします。いちどきにはございませんよ。ちよいちよいいたします。自分では腹の立つたび、お酒を一口ずつのむようなつもりでいたします。かかりつけの先生が、こんなこととしていて、あえない最後をとげるつもりですかと仰言つたんで、ひよつとしたらそのつもりではないかしらつて、そう思いました。麻薬ではないからやめられない筈はないと云われるのですけれど、いつも注射をしてる時間がまいますと、頭のなかとからだとが、ぶるぶるふるえてまいりますの」

「どういうときに、その注射をもつともたくさんさりたいですか」

篤子は答えにくかつた。自分が女の患者だという意識があつた。政治の問題にふれる言葉が咽

喉につかえている。医師はおそらく女患者からそういう種類の返答をきこうとはしていないのだ。しかし言葉の応答による診察をうけているのである以上、相手の恩惑を考えて、答えを誤間化すことは便利ではない。篤子は、日本のサンフランシスコにおける講和条約、日米安全保障条約、日米行政協定につづいて、破防法まで来た政策の進展を見ていて、これらの連鎖的に起つてくるものが、戦争の準備の象徴のように思い込まれ、一刻も醒めているのがいやになつて、次第に睡眠剤と注射液がふえたのだということを、ぼつりぼつりと医者に云つた。

「中立でいらつしやいますか」

「はあ」

篤子はあいまいに答えた。

「幻覚はございませんね？」

「ございません」

「それでは一週間ほど眠つていただきましょうか。眠り薬とその注射をおやめになつて、ずつとらくにおなりになります」

昼夜さめることなく、一週間ねむることができるのだ。すくなくともそのあいだは、なにも知らないでいられる。一週間という期間の決め方に、多少の駆引きがかんじられなくはなかつた。しかし篤子は一応相手の医師に信頼して寝台を降り、笑い顔になつて頭をさげた。篤子は廊下に出るとき、